

# 日本をキリストへ 協力

「日本をキリストへ」  
伝道団体連絡協議会

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1  
TEL 03-3291-5035 (総動員伝道内)  
www.gospeljapan.com/dd/

## 「どうせ、やっぱり」

伝道団体連絡協議会会長

村上宣道



「私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」  
(ピリピ四章十三節)

同じ言葉であつても、その使い方によつては、生き方やその姿勢までもが大きく違っていくということがありそうです。心理学者の多湖輝という方が、いわば努力放棄語、思考停止語ともいふべきもの

と云つておられる。どうせ、やっぱり、などの言葉は、そのひとつの例なのではないでしょうか。この言葉を「どうせ私なんか：」「やっぱりダメだ：」というようにマイナス的に使うと、すっかりやる気を奪ってしまうというわけです。これを心理学的に言いますと、「私はもうあきらめました」ということを堂々と云えないため、どうせ、やっぱ

り、所詮、という言葉をつけることにより、自分の気持ち、自分のマイナスを正当化していくことになり、そのため自分をその殻から一步も出れないようにしてしまうのだそうです。

私たちが普段、何気なく使っている言葉でも、それは時に、大きな自己暗示力として働くので、多湖氏は「もしあなたが無用な劣等感にとりつかれているとしたらば、どうせ、やっぱり」の二大タブー語を、あなたの会話や文章から消し去って下さい」とまで言っています。

今度は、どうせならこれをプラス的に使うようにしてみたらどうでしょうか。

たとえば、「一度限りの人生、どうせ、生きるなら、意義深く、実りある人生を生きよう」というように。また、「私はダメ人間ではないけど、でも、神は、やっぱり、こんな私をも愛してくださっているのだから大丈夫」といった具合にです。

パウロという人は、自分は誰よりも小さく弱い者と告白しながらも、「私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」(ピリピ四・十三)とさえ言い放っています。マイナスからプラスへの切り換えが見事というほかありません。私たちもそのような、キリストによる切り換えができれば、きっと生き方も変わるのではないのでしょうか。

# 伝道協情報交換会報告



二〇〇三年二月五日（水）午後二時からお茶の水クリスチャンセンター一四一五号室にて、本年度の情報交換会を持った。今回は、十二団体から十二名の参加者が集まり、礼拝（第一部）、情報交換（第二部）、祈り会（第三部）の順で会が進められた。

まず、礼拝では始めに「わが身の望みは」を讚美し、その後に姫井雅夫師がエレミヤ二十九章十一節からメッセージを取り次がれた。

「今日は、奇しくも長崎の二十六聖人の殉教から四百年目にあたる特別な日である。日本には、七九二のプロテスタントの教会がある」とされているが、牧師の高齢化が進み、日本基督教団においては、近年中に五〇〇の教会が無牧になることが予想される。これからは、より緊迫感をもって伝道し、また献身者の発掘と育成にあたらねばならない。エレミヤの時代には、預言者の語るみことばに耳を傾ける者が少なかった。そのような困難な状況の中で、エレミヤは約束のことばを持って民を励まし続けた。今日、私たちは、伝道団体としてゆだねられた使命を確認し、困難な時代の中にも主の約束の力を受けて宣教の働きを担っていきたい。」

最後に、「歌いつつ歩ました。」を全員で讚美し、黙祷をもって礼拝を終了した。

第二部の情報交換会では姫井師が進行役を担われ、まず、三つの団体（全日本福音宣教会、日本聖書刊行会、パラビジョン）が、諸事情の故に脱退に至ったとの報告がなされた。また、経済的な理由から四国福音放送伝道協力会が、本年をもって脱退の予定である旨が報告された。

続いて、伝道団体連絡協議会に加盟する四十三団体の現状と祈りの課題についての報告がなされた。

今回、情報交換会に参加された団体は、昨年とほぼ同数の十二団体であった。その参加団体が、それぞれの活動や祈り課題を発表する時を持った。その中のいくつかを紹介する。

教会数は、若干ではあるが増えているものの、信徒数は、全体的に停滞している。現代人のニーズに合った伝道に対する方策や考え方を模索している状況である。また、電話で、教会を紹介して欲しいとの問合せがいくつかの伝道団体に寄せられている。

参加団体および参加者は以下の通りであった。いのちのこば社伝道グループ（萩生田氏）、クリスチャン新聞（藤川氏）、教会インフォーメーション・サービス（花蘭主事）、国際ナビゲーター（洪沢主事）、総動員伝道（北条牧師）、小さないのちを守る会（辻岡代表）、光のミッション（門屋代表）、日本伝道者協力会（姫井牧師）、日本聖書協会（野中姉）、福音主義医療関係者協会（稲葉会長）、ブリッジ・フォー・ピース（佐々木氏）、日本キリスト伝道会（鈴木氏）以上である。

第三部の祈り会では、三人ずつの四グループに分かれて、それぞれの団体の出された課題と、互いの課題を分かち合い、祈りの時を持った。午後四時十分に散会した。

（報告者：国際ナビゲーター 洪沢浩二）

## 伝道団体訪問ツアー

J T J 宣教神学校

上野駅入谷口に集合した私たちを岸義紘校長自身が迎えて下さり新校舎の玄関先で金奉任理事長がわざわざ出張を一日延期して笑顔で出迎えてくださった。

J T J 神学校は、新しい皮袋としての神学校 JESUS TO JAPAN MISSION SEMINARY としてスタート。モットーは「キリストの愛の中で、自分を愛することを学び、隣人を愛することに生きる」。だれでも、いつでも、どこでも



金理事長・岸校長とともに



J T J 宣教神学校 事務スタッフ

学べる神学校の実現である。J T J の目的と理念は（新しい皮袋に）。そして創立の趣旨は、クリスチャン人口一％、礼拝出席者人口〇・二％の日本の宣教実情に対して、憂えると同時に挑戦の情熱によって一九九〇年にスタートした偏らない超教派の神学校である。世界宣教の任務を果たすために、学生たちが聖書の学び方を知り、神学することを身につけ、実践的訓練を受けられるように専門的機會を提供すること。神学的立場は、穏健なプロテスタント福音主義で、聖書を神の真理の言葉と認め、キリストを神の子、救い主と告白し、すべてのクリスチャンは宣教の働きへの召命を受けていて、「キリストにあつて一つ」であることを大切にしていく。

特徴は、神と時代の要請に応えようとして、年間千人の卒業生を目指して、そのために門戸を大きく開き、仕事を続けながらでも入学できる通信制を導入して十三年。神学生の七割は仕事と家庭があり、何年在学しても授業料は同じ、長期休学しても復学出来るようにし、底辺を広くして神学生の要請にも応えている。現役の学校教師も退職後の目標を設定して備え、四十歳以上の学生も多い。

教団の神学でなく超教派の交わりの中で神学を学び、卒業後教団の神学校に留学するように薦め、継続学習を促し、神学校卒業後も学べるものは卒業後に学ぶことを勧めている。所属教

会の指導牧師と神学生との連携も大切にし、教会が期待しているリーダー育成にも努めている。岸義紘校長、金奉任理事長のもてなしと配りを含め、各伝道団体の出席者とJTJが目指す刷新論の話し合いに熱気がこもり、しばし時間の経つのも忘れ、共々に宣教熱のボルテージが上昇し、情熱が一つであることが確認された。

JTJ刷新論とは、「伝統を確認しつつは、伝統が固定的・絶対的になつて神聖化されてしまうと、時代とかみ合わず、かえってマイナスが生じ得る。だから守るべき伝統と、変革が必要となる伝統や制度を見きわめ、時代に生きる人々を捕らえるためにも、勇気と決断をもつて変革を取り組むことが必要である。福音は永遠不変であるが、しかし制度や伝統は、そもその出発点から、時代のニーズに合わせて変わらざるを得ないか。」という確信論である。

爆発的ダイナミックな日本伝道を展開するために、今の日本には、今の日本の伝道あり方がある。日本人に合った伝道！アウトリーチ伝道の展開急務を共に確認した。

話が熱気を帯びてくる中で岸義紘校長は、二度泣かれた。その涙の中に私たちは岸義紘校長の救霊の情熱とあくまでもキリストの愛の中で隣人を愛し、また同労者である牧師先生方のため祈りと、愛しぬかれてある愛の生き様を垣間見せていただいた。苦しみを共にしようとする伝道者への理解と痛みの涙であった。

また金奉任理事長は社会的にもいろいろ重要な立場にあり、深い人生経験ながら、ひみ出てる高潔な人格の持ち主としての立場で、学生一人ひとりへの気配りと愛に、心打たれ探られたひとときでもあった。主は人を用いて救霊の業を成就される。お互い伝道者の品性についても深く探られた。

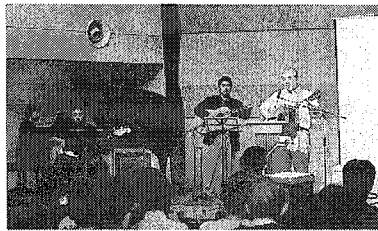
今回の訪問は、参加者一人一人にとって主からの大きなチャレンジであり、更に交わりを深め恵みを分かち合うツアーとなった。私たち伝協は主にあつて一つである！確信が更に深まり、交わりの大切さを教えられた。伝協協の交

わりに神が共にいてくださる！貴重な体験をさせていただいた。私たちを一つにし熱くしうまいようとして下さっている主にすべての栄光を帰しながら、尊い主の器としてこの宣教に召されたいことは大きな特権であると、共に確認させられた恵みのツアーであった。すべての栄光を主に。ここに私がいいます。お遣わしく下さる。

(小さないのちを守る会代表 辻岡健象)

## 伝道団体紹介

### お茶の水クリスチャン・センター 関根一夫



お茶の水クリスチャン・センターは今から約五十年前にアイリーン・ウエブスターミス先生によって始められた青年学生のための伝道団体です。いろいろな変遷を経て現在に至っています。が、伝道団体としてのスピリットは全く失われていません。

「マスタードシード」という中高生のための英語のクラスと夏のアメリカホームステイプログラムは好評のうちに継続されています。特にホームステイ・プログラムに参加した多くの中高生はキリストの愛に触れられ、感動しながら帰国してきます。中には、それがきっかけでアメリカへの留学を果たした学生もいます。キリストの愛に触れるきっかけを、いろいろな形で提供したいというスタッフの心が学生たちの心に温かいものを届けています。

現在、前とは違った形の語学教室ができないものかと模索中です。また、昨年から新しい動きが再開されました。金曜日の夜八階のホール

で開催されている「フライデーナイト」という集会の再開です。昨年は毎月一回だけの開催でしたが、現在は毎週開催されています。しかも、いろいろなメッセージングもお招きしての明るい集会には、クリスチャンもそうでない人も集まってきています。参加者は高校生から会社員まで、多種多様です。学校帰り、会社帰りの方々に人気があります。多くの若い牧師たちが協力してくれています。集会としては、文字通り、超教派の楽しい集まりです。CLC(クリスチャン文書伝道団)の協力も得て、フライデーナイトの集会后、本の販売をしていただければ、お店を開けていただいたりしております。参加者にとつてうれしい出来事になっていきます。その時間しかお茶の水クリスチャン・センターに立ち寄れない方々もいますので、そういう協力は貴重であり有益です。

そういえば、「高齢者社会をどう生きるのか」という講演会が「芸術造形研究所」との協力で開催されましたが、その集会を太平洋放送協会のスタッフに録画してもらい、テレビ番組「ライフライン」で使っていただきました。その放送は大好評だったようです。

いろいろな団体と、心を合わせ、できることを分かち合い、コラボレーションをしていくことは今後の様々な伝道活動のために必須ではないかと考えています。他団体の祝福を心から喜び、心から願う団体でありたいと思います。

### いのちの水・計画 守部喜雅

一九八二年五月に、「いのちの水・計画」がスタートして以来、この二十年間に、延べ七千人以上の日本人クリスチャンが言葉をお届けする中国旅行に参加してくださりました。一度きりの方も多いのですが、なかには、毎年、一回は必ずこの旅行に加わってくださる方、定年後、年に何回も奉仕してくださる方、と様々です。年齢もお母さんの背中におぶさった幼児から八十歳を超えた方まで幅広く、この働きに加わったことがきっかけとなって、伝道者や宣教師の道

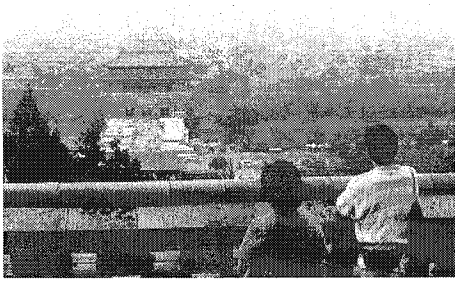
「伝団協」加盟団体「ニュース・フラッシュ」

を歩み始めた方も少なくありません。さすがに、毎年の参加者の数は、初期の頃に比べ、少しずつ減ってはいますが、参加者が中国旅行で受けた霊的祝福は、今も変わりなく大きいのです。それは、この中国の苦難の中にあるクリスチャンに聖書を届けるという計画が、伝道する側の思惑で始まったのではなく、あくまでも、中国の信徒の「聖書を届けてください」という叫びがあり、それに応答するかたちで日本有志が立ち上がったという経緯があるからだと思います。言い換えれば、この働きは、中国の方から「み言葉をください」という声が聞かれなくなったら一つの節目を迎えることになるでしょう。

この二十年間、中国の宣教事情にもいくつかわりがありました。同じ教会でも、政府の管理下にある教会には聖書を手に出来る状況が年々広がっています。そのため、今なお、聖書を自由に求めることに困難を覚えている、特に、農村地帯の家の教会のクリスチャンたちの必要が忘れ去られる傾向があるのです。

今も、中国の多くの辺境の地から「み言葉をください」という声を「いのちの水・計画」には聞き続けています。それは、中国の都会の教会には決して知り得ないうめきのようなものです。そして、何かを与えるという意識でなく、中国の主にある兄弟姉妹に仕えるという姿勢でのみ、この働きは実を結ぶという真実を教えられています。

この二十年、現地でふれる中国人を許さなかった中国人クリスチャンの苦難の中の信仰は、日本人クリスチャンの霊性を高めてくれた……これこそ、この働きが続いている祝福の理由だと思えます。



- 日本キリスト伝道会 日本キリスト伝道会は八月十八日から二十日まで市川サンステイターにて第三十五回日本伝道の幻を語る会を開催。講師・山北宣久師、中野雄一郎師をお招きします。
- EPOC 高校生聖書伝道協会 毎週、定期集會を関東で十八ヶ所、関西で七ヶ所、さらに特別集會等を月三回渋谷EPOCセンターで行ない、高校生の伝道や訓練に励んでいます。
- 日本キヤンパスクールセード 二月十三日から十八日までタイでCCC東アジア地区オールスタッフファンファレンスもたれ、東アジア全体では二千六百名が参加しました。
- 日本伝道者協力会 創立者のおひとり、本田弘慈師の召天一周年を記念して大会を開きます。四月十一日午前十時から午後八時半、OCC八階ホールにて、多くの講師を迎えています。
- 日本国際飢餓対策機構 イラクとの戦争が平和裏に解決することが一番の願いです。万が一始まった場合、イラクに入ってどのような団体と緊急援助活動を共にしていけるかを探っています。お祈りください。
- 太平洋放送協会 二〇〇三年度は①いよいよテレビ・スタジオ、編集・ダビング室の改修・改造を始めます。よりよい番組制作のため機能的な編集・スタジオ、が整えられますように。②京都に関西制作室を設け、近畿から九州に至る地域の制作・協力関係を充実させていく準備を進めています。お祈りください。
- 総動員伝道 改訂された教材が用いられるように。また本田師の記念誌の編集作業に主の導きがありますように。
- いのちのことば社伝道グループ 「百万人の福音」事務所をOCCビル内に移し、クリスチャン新聞との提携・協力を進めています。両誌面を通して、より機能的に文書伝道が広げられていきますようお祈りください。

**公 示**

＜総会のお知らせ＞

日時：2003年4月14日(月)  
14時～16時

場所：OCCビル  
(お茶の水  
クリスチャンセンター)  
415号室

※各団体1～2名の参加をお願いします。

(伝道団体連絡協議会とは)

キリスト教界には大きく分けて二つの分野があります。キリストの十字架の血によって罪赦された人々の集まりとしての「教会」と、クリスチャンになった者たちがそれぞれの使命をもって専門的な分野で伝道活動、福祉活動などをしていっている「伝道団体」です。この二つはともに協力し合って神の福音を伝え、神の国の拡大に務めています。教会と伝道団体はともに助け合ふ必要があります。伝道団体がバラバラに活動していたのでは、教会にとって協力しにくいし、伝道団体相互にとつても力を欠くことになり、そこで連絡のために一つになろうと「伝道団体連絡協議会」が生まれました。現在約五十弱の団体が傘下にあります。

発行日 二〇〇三年三月三十一日

発行者 村上宣道

編集者 萩生田 充